

日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(4)： 中学生用の調査項目の検討

北 條 礼 子*
(平成9年10月16日受理)

要 旨

日本人 EFL 学習者のうち中学生が外国語(英語)を学習するときに用いている学習方略とその関連要因として動機づけ、知覚的学習スタイル好性、性格特性を調査するための項目を検討するため、先行研究の結果を参考に、それぞれ27, 8, 6, 14項目、計55項目に関して、1997年3月に中学生59名を対象に調査を実施し、データは因子分析により分析した。その結果、各要因についてそれぞれ4因子, 4因子, 2因子, 3因子を抽出し、それぞれ22, 8, 6, 11項目の計47項目が含まれていた。

KEY WORDS

学習方略	learning strategy	動機づけ	motivation
知覚的学習スタイル好性	perceptual learning style preference		
性格特性	personality	英語科教育	English education
語学教育	language education		

1. 研究の背景

筆者はこれまで、日本人 EFL 学習者が用いている学習方略を調査するため、高校生、大学生を対象として、学習方略とその関連要因である動機づけ、知覚学習スタイル好性、性格特性に関する調査項目を選定しその上で、調査を行ってきた(北條, 1996;1997a;1997b;1997c)。

その結果、まず学習方略については、「コミュニケーション志向」、「英文中心計画的英語接触努力」、「単語中心暗記学習」の3因子が抽出された。また、動機づけに関しては、「統合的動機づけ」、「プライドの充足」、「道具的動機づけ」、「成績向上意識」の4因子を、さらに、知覚的学習スタイル好性については、「視聴覚・ゲーム型」、「体験型」、「聴覚型」の3因子を、最後に性格特性については、「冒険心」、「低外向性」、「自尊心」、「権威主義」の4因子をそれぞれ抽出した。

しかしここで、学習方略に関する研究の対象範囲を英語の初学者である中学生に拡大するためには、既に作成した調査項目をそのまま用いることが可能であるかどうかをまず確認する必要があると考えられた。そのためには、これまでの知見を基に、以上の調査項目を改めて検討することが必須であろう。そこで学習方略については中学生を対象者とした Ogino(1994)をはじめとする先行研究結果を参考とした27項目、知覚的学習スタイル好性に関する6項目と動機

* 言語系教育講座

づけに関する8項目はこれまでに筆者が用いてきた項目、さらに性格特性に関する項目については、あいまい性への耐性に関する項目(山本, 1994)を加えた14項目を検討することにした。特に、性格特性については、これまで数度の先行研究において安定した結果が得られなかったもので、今回さらに新しい項目を加えるなど修正を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人 EFL 学習者のうち、特に中学生が英語学習において用いている学習方略とその関連要因である動機づけ、知覚的学習スタイル好性、性格特性を調べるための項目を検討することである。

3. 研究の方法

3.1 対象者：新潟県公立中学2年生59名

3.2 測定具：55項目から成る5段階尺度形式のアンケート：

その内訳は、①学習方略に関する27項目(項目1-27)

②動機づけに関する8項目(項目28-35)

③知覚的学習スタイル好性に関する6項目(項目36-41)

④性格特性に関する14項目(項目42-55)

の合計55項目から成る調査項目である。

3.3 調査実施時期：1997年3月

3.4 手続き：約20分の実施時間で、集団調査を行った。本研究で扱う部分について述べると、回答形式は①については「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階で、②から④については「1.まったくそう思わない、2.どちらかというところをそう思わない、3.どちらでもない、4.どちらかというところをそう思う、5.まったくそう思う」の5段階で、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：因子分析

4. 研究の結果

4.1 平均・標準偏差

英語学習において日本人 EFL 中学生が用いている学習方略、動機づけ、知覚的学習スタイル好性、性格特性に関する計55項目への回答について、「いつもそうする」または「まったくそう思う」を5点、「まったくそうしない」または「まったくそう思わない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目の平均と標準偏差を示したものである。

以上の27項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えた項目43の質問項目

表1：各質問項目の評定得点の平均と標準偏差 (N=59)

項目	Mean	SD	項目	Mean	SD	項目	Mean	SD	項目	Mean	SD
1	3.41	(1.08)	15	2.98	(1.27)	29	3.42	(1.16)	43 [▲]	3.95	(1.12)
2	3.00	(1.07)	16	3.64	(1.01)	30	3.20	(1.19)	44	2.44	(0.79)
3	3.71	(1.13)	17	2.85	(1.03)	31	3.36	(1.20)	45	3.54	(1.12)
4	2.69	(1.18)	18	2.92	(1.04)	32	3.93	(1.00)	46	2.95	(1.11)
5	2.88	(1.16)	19	2.83	(1.25)	33	3.76	(0.95)	47	2.76	(1.12)
6	2.75	(1.09)	20	2.71	(1.08)	34	2.93	(1.13)	48	3.32	(1.27)
7	3.22	(1.13)	21	3.00	(1.10)	35	2.86	(0.97)	49	3.15	(0.87)
8	3.63	(1.20)	22	2.00	(1.05)	36	2.80	(1.23)	50	3.14	(0.99)
9	3.34	(1.15)	23	2.64	(0.94)	37	2.53	(1.06)	51	2.95	(1.12)
10	3.42	(1.04)	24	3.31	(1.15)	38	3.22	(1.26)	52	2.66	(0.86)
11	2.53	(1.13)	25	3.98	(0.92)	39	2.95	(0.92)	53	2.08	(1.07)
12	3.31	(1.16)	26	3.85	(0.89)	40	3.42	(1.02)	54	3.34	(1.21)
13	3.25	(1.12)	27	3.07	(1.05)	41	3.14	(0.88)	55	2.93	(1.16)
14 [▲]	3.92	(1.26)	28	3.27	(1.10)	42	2.81	(1.04)			

カッコ内は標準偏差

▲ 天井効果と判断された質問項目

を、天井効果が生じたものと判断し、因子分析に持込まなかった。

4.2 因子分析の結果

4.2.1 学習方略について

英語学習における学習方略に関する27項目の得点について、天井効果を示した1項目はその内容から削除しないこととし、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンはを表2に示すとおりである。

因子の解釈にあたり、基本方針として、表2の回転後の因子パターンにおいて絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。27の調査項目のうち、項目22, 4, 8, 1の4項目を除く23項目が.50未満を示したので、これら4項目を解釈からはずすことにした。

因子Iに.50以上の負荷量を示した項目を表3にあげた。因子Iには項目15, 14, 20, 13, 16, 11, 6, 5の計8項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、基本本文を何回も書いたり、声に出したりしておぼえたり(項目15, 20)、単語も何回も書いたり、単語カードを利用しておぼえたり(項目14, 11)、文章をそのままとらえようとする学習の様子(項目6, 5)や、参考書、ワークブック、単語カードを利用して勉強する傾向(項目16, 11)が見て取れる。以上から、因子Iは暗記を中心とした学習者の日常的な英語学習方法と考えられたので、「暗記中

表 2 : バリマクス回転後の因子パターン

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目15	0.75929	0.17688	0.04487	-0.10588	0.62104
項目14	0.65792	0.21410	0.16453	0.31162	0.60288
項目20	0.62195	0.24911	0.37133	-0.25547	0.65204
項目13	0.61845	0.43797	0.06122	-0.05452	0.58102
項目16	0.61467	-0.10480	0.38442	0.18597	0.57117
項目11	0.53087	0.14213	0.16165	0.16867	0.35661
項目 6	0.52988	0.03106	-0.16917	0.33758	0.42432
項目 5	0.50591	0.21959	0.25140	0.02611	0.36805
項目22	0.36757	0.03990	0.22057	0.00243	0.18536
項目 9	-0.26081	0.78436	0.12021	0.18496	0.73190
項目 7	0.23493	0.66840	0.11864	-0.04093	0.51770
項目27	0.45760	0.60414	-0.13976	0.19839	0.63327
項目24	0.27790	0.58332	0.07670	0.16544	0.45075
項目10	0.28933	0.58089	0.22798	0.11973	0.48746
項目23	0.20111	0.57173	0.30687	0.04522	0.46354
項目 3	0.15108	0.56876	0.49021	0.20130	0.62714
項目17	0.13722	0.28588	0.74634	-0.08589	0.66496
項目12	0.14857	-0.06159	0.64751	0.39656	0.60239
項目18	0.30178	0.11002	0.63495	-0.00606	0.50637
項目21	0.02015	0.11666	0.57203	0.22519	0.39195
項目19	0.38609	0.28348	0.56188	-0.19874	0.58464
項目 4	0.09454	0.19119	0.48059	0.43234	0.46338
項目25	0.13323	0.18746	-0.03061	0.83105	0.74447
項目26	-0.10285	-0.00612	0.04033	0.66745	0.45773
項目 8	0.15993	0.18035	0.32176	0.48769	0.39947
項目 1	0.37011	0.25601	0.35030	0.48444	0.55992
項目 2	0.07521	0.43125	0.43739	0.44829	0.58390
説明分散	4.15392	3.71535	3.59895	2.76516	14.23339

(注) 枠囲いされた数値は0.50以上。

心学習」と命名した。

次に、因子IIに .50以上の負荷量を示した項目を表4にあげた。因子IIには項目9, 7, 24, 10, 23の計5項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、単語の意味調べ(項目9, 7)や、自分の誤りの理由を考えたり、英語のよりよい勉強法を見つける努力をするという自己チェック的な英語学習への取り組み(項目24, 23)や、さらに正しい発音をする努力(項目10)から因子IIが成り立っていることがわかった。以上から、因子IIは学習者が自己チェックを含んで自ら積極的に英語学習に取り組んでいる姿を表していると考えられたので、「自己チェック的積極的取り組み」と命名した。

表3：因子Iの負荷の大きい項目とその内容

項目番号	負荷量	項目の内容
15	.76	基本文は何回も書いておぼえる
14	.66	単語は何回も書いておぼえる
20	.62	基本文は何回も声に出して、暗唱する
13	.62	授業で聞き逃した単語や文法について、授業以外の時間に勉強したり、練習する
16	.61	参考書やワークブックで勉強する
11	.53	単語や熟語は単語カードを利用して暗記する
6	.53	文章は文法の規則で分析せずに、できるだけそのまま暗記する
5	.51	英文を読むとき、知らない単語の意味を調べる前に、文全体の意味をまず考えてみる

表4：因子IIの負荷の大きい項目とその内容

項目番号	負荷量	項目の内容
9	.78	英文を読むとき、全体を読む前にわからない単語の意味を調べてその意味を長文の横に書込む
7	.67	辞書で単語をよく引く
24	.58	人から誤りを指摘されたらその理由を考える
10	.58	正しく発音する努力をする
23	.57	英語の勉強がうまく進む方法を見つける努力をする

また、因子IIIに .50以上の負荷量を示した項目を表5にあげた。因子IIIには項目17, 12, 18, 21, 19の計5項目が含まれていた。これらの項目内容を見ると、すべての項目が単語学習と関連していたことから、因子IIIは、「単語中心学習」と命名した。

表5：因子IIIの負荷の大きい項目とその内容

項目番号	負荷量	項目の内容
17	.75	単語をおぼえるとき、発音とイメージや映像を結びつける
12	.65	単語や熟語は単語テストで暗記する
18	.63	単語をおぼえるとき、すでに習っている単語と結びつけておぼえる
21	.57	単語が思い浮かばないときは日本語でおきかえる
19	.56	単語は何回も声に出しておぼえる

さらに、因子IVに .50以上の負荷量を示した項目を表6にあげた。因子IVには項目25, 26の計2項目が含まれていた。これらの項目内容を見ると、英語学習でわからないところがあると他の人に援助を求める姿勢（項目25, 26）と考えられるので、因子IVは「援助要求」と命名した。

表6：因子IVの負荷の大きい項目とその内容

項目番号	負荷量	項目の内容
25	.83	英語の勉強でわからないところは人に教えてもらう
26	.67	英語が思いつかないとき、他の人から教えてもらう

4.2.2 動機づけについて

英語学習における動機づけに関する8項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.70以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表7に示すとおりである。

これらの項目内容を見ると、筆者の行った先行研究(1997)と同様に、第I因子は「プライドの充足」、第II因子は「統合的動機づけ」、第III因子は「成績向上意識」、第IV因子は「道具的動機づけ」と命名した。

表7：バリマクス回転後の因子負荷量(動機づけ)

	因子I	因子II	因子III	因子IV	共通性
項目35	0.92857	0.11941	0.07176	-0.06288	0.88561
項目34	0.86459	0.11264	0.16834	0.12072	0.80312
項目28	0.19220	0.89845	0.13237	0.18498	0.89588
項目29	0.05679	0.89736	-0.01872	0.30619	0.90259
項目32	0.04116	0.03628	0.90789	0.21731	0.87451
項目33	0.51126	0.05443	0.72932	-0.11476	0.80943
項目31	0.13990	0.40132	-0.10723	0.82658	0.87536
項目30	0.04633	0.20936	0.43351	0.79399	0.86433
説明分散	1.93473	1.84858	1.60697	1.52054	6.91082

(注) 枠囲いされた数値は0.70以上。

4.2.3 知覚的学習スタイル好性について

英語学習におけるに関する知覚的学習スタイル好性6項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて2因子解を適当と判断した。その結果として、再度2因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に2因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表8に示すとおりである。

これらの項目内容を見ると、第I因子には視聴覚からの刺激を好む傾向が含まれていたため

「視聴覚・ゲーム型」と命名し、第II因子には学習者が自らの体験を好む傾向が見て取れたので「体験型」と命名した。

表8：バリマクス回転後の因子負荷量（知覚的学習スタイル好性）

	因子 I	因子 II	共通性
項目36	0.90504	-0.06809	0.82373
項目37	0.81113	0.22227	0.70733
項目38	0.47036	0.07715	0.22719
項目40	0.41510	-0.02275	0.17282
項目39	0.06584	0.90437	0.82223
項目41	0.04396	0.90150	0.81463
説明分散	1.87683	1.69110	3.56792

(注) 枠囲いされた数値は0.40以上。

4.2.4 性格特性について

英語学習における性格特性に関する14項目の得点について、天井効果を示した項目43の1項目を削除した後の13項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その結果として、再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に

表9：バリマクス回転後の因子パターン（性格）

	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
項目55	0.73802	-0.15261	-0.23985	0.62549
項目54	0.72039	0.03973	0.06130	0.58165
項目49	0.67069	-0.03411	0.15284	0.47435
項目48	0.59212	0.20326	0.43557	0.58165
項目45	0.55219	0.28505	0.32526	0.49195
項目52	-0.00165	0.83627	-0.03726	0.70075
項目44	-0.02759	0.79899	0.18918	0.67193
項目53	-0.09326	0.58099	0.35824	0.47458
項目50	0.47825	0.57077	-0.01544	0.55473
項目46	0.08864	0.48395	0.21510	0.28833
項目42	0.09002	0.28639	0.81263	0.75050
項目47	0.21342	0.17728	0.80421	0.72373
項目51♦	0.55040	0.05170	-0.58168	0.64397
説明分散	2.77161	2.49997	2.23767	7.50925

(注) 枠囲いされた数値あるいは下線を引いた数値は | 0.50 | 以上。

♦ 両義性が見られた項目

3 因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .50以上の因子負荷量を示した12項目のうち、両義性を示した項目51の1項目を除外した計11項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表9に示すとおりである。

これらの項目内容を見ると、第I因子には権威に対する態度とあいまい性の耐性が主に含まれていたので「権威・あいまい性耐性」と命名し、第II因子には自尊心と外向性が含まれていたので「外向性・自尊心」と命名し、第III因子には冒険心が含まれていたので「冒険心」と命名した。

5. 研究の考察

5.1 学習方略について

英語学習において中学生が用いている学習方略の因子を解釈した内容を一覧すると、以下のようになった。つまり、4因子が抽出され、因子Iには8項目、因子IIには7項目、因子IIIには5項目、因子IVには2項目の計22項目が含まれていた。

因子I：暗記中心学習

因子II：自己チェック的積極的取り組み

因子III：単語中心学習

因子IV：援助要求

筆者はこれまで日本人 EFL 学習者のうち大学生、高校生を対象とし、英語学習において用いている学習方略に関する調査を行ってきた(1996, 1997a, 1997c)が、その結果、「コミュニケーション志向」、「英文中心計画的英語接触努力」、「単語中心暗記学習」の3因子が抽出された(1997a)。この結果と比較してみると、大学生と中学生を比較した場合、単語を中心とした学習であることと、暗記を重視した学習である点に類似が見られた。また、含まれている項目に若干違いがあるが、メタ認知方略に分類される、自己チェックの態度も共通していたと言えよう。ただし、大学生と比べて、中学生の場合は、他人に援助を求めるといふ、社会的方略が因子として抽出されたことが特徴的であろう。

5.2 動機づけについて

英語学習における中学生の動機づけの因子を解釈した内容を一覧すると、以下のようになった。つまり4因子が抽出され、各因子にそれぞれ2項目の計8項目が含まれていた。

因子I：プライドの充足

因子II：統合的動機づけ

因子III：成績向上意識

因子IV：道具的動機づけ

動機づけに関する本研究の結果では、筆者による先行研究(1997)による結果と全く同じ因子が抽出された。動機づけについては、第2言語習得の研究分野において指摘されてきた統合的動機づけ、道具的動機づけの他に、プライドの充足、成績向上意識という動機づけが今回の結果でも抽出された結果となった。これは、Scarcella(1992)が述べているように、動機づけには、統合的動機づけ、道具的動機づけの他にも異なる種類の動機づけが存在するのではない

かという仮定を裏付ける新たな証拠となると推察される。さらに、本研究で抽出された、成績向上意識は、語学学習において試験の準備が最大の動機づけであるという、LoCastro(1994)の指摘を支持するものであった。彼女の研究の対象は大学生であったが、日本人 EFL 学習者の場合、中学生であってもすでに同種の動機づけが見出されたことになる。

5.3 知覚的学習スタイル好性について

英語学習における中学生の知覚的学習スタイル好性の因子を解釈した内容を一覧すると、以下のように2因子となった。なお、因子Iには4項目、因子IIには2項目の計6項目が含まれていた。

因子I：視聴覚・ゲーム型

因子II：体験型

Reid(1987)の報告するところによると、視覚型・聴覚型による知覚の好みの型は、重要な要因であるにもかかわらず、L2教育の分野でほとんど研究の対象とされてこなかった。またBrown(1994)も、この種の学習スタイルは、通常の語学の授業では非常に重要であると述べている。現在の日本における英語の授業において、バラエティに富んださまざまな教材が用いられている。例をあげれば、テレビの英語番組、英語の映画、アニメ番組、ビデオ、LDなどの視聴覚教材、教科書、プリント教材、写真、挿絵などの視覚教材、オーディオ・テープやCD、ラジオの英語番組などの聴覚教材である。さらに、この他に、コミュニケーション能力を目的とし、各種ゲームやロール・プレイも実施されているのが現状であろう。

今回の結果を見ても、英語学習における知覚的学習スタイル好性は、視覚型と聴覚型が重複する傾向があることが、筆者による先行研究(1997b; 1997c)と同様に再度確認された結果であった。この傾向は、学習者のおかれた教育環境を見ると、以上に述べた視聴覚教材に触れる機会が多いことから納得のいく結果であろう。さらに、ALTとのティーム・ティーチングでゲームが用いられる機会が増加したこと、中学校の英語の授業においても、コミュニケーション能力の育成を重視する方向が見られ、そこで各種ゲームが用いられていることから、中学生が英語の授業を視聴覚教材とゲームを組み合わせたものと感じるのは自然な結果であると推察される。

体験型については、筆者による先行研究(1997b)においても単独で抽出された結果を指示する結果であった。

5.4 性格特性について

英語学習における中学生の性格特性の因子を解釈した内容を一覧すると以下のようになった。つまり、3因子が抽出され、因子Iには5項目、因子IIには4項目、因子IIIには2項目の計11項目が含まれていた。

因子I：権威・あいまい性耐性

因子II：外向性・自尊心

因子III：冒険心

Tsuchihira(1993)は、Ellisの概念を基に、日本人の良き言語学習者の特性として、①動機づけ、②外向性、③権威主義、④協調性、⑤自尊心、⑥冒険心、⑦社会的スキルの7点を仮定した。彼女のあげた特性のうち、①動機づけ以外は性格特性であるが、Tsuchihiraは、以上の性

格特性と到達度の関係を調べた結果、到達度と外向性、社会性、権威主義、自尊心との間に方向性の違いはあるが、相関関係がみられたことを報告している。

また、Ohmura (1996)は、言語学習に関係しているといわれる性格特性を測定するため、上記の Tsuchihira の仮説を参考に、①の動機づけを除いた6つの特性を性格特性として扱った。Ohmura が予備調査を経て調査項目を選定し、研究を行った結果、日本人学習者の英語到達度と関連していた性格特性は冒険心、自尊心、外向性、権威に対する態度であった。

本研究では以上の性格特性に、さらに Brown (1994) が言語学習に関連していると述べたあいまい性への耐性に関する調査項目を付け加えた。その結果は、冒険心のみは、単独で抽出されたが、その他の4種類の下位区分はそれぞれ2つに組み合わされた形で抽出された。

この中には Ohmura が抽出した性格特性はすべて含まれていたが、Ellis (1986)が指摘したとおり、性格特性の同定と測定の困難さを裏付ける結果となったと判断される。本研究で用いた項目は、すべて心理学の分野で開発された項目を選択した上で用いた項目であるが、必ずしもその区分が分析結果で確認されたといえない結果であった。

Ellis (1994)はまた性格特性に関する先行研究を概観し、問題点を4点にまとめた。その4点のうち特に、第一点の、性格の変数が非常に混同しているという指摘と、第二点の、性格変数は定義が確立されていない状態にあり、曖昧で重複している、という指摘を裏付ける結果であったといえよう。ただし、今回の対象者の数が必ずしも多いとはいえないので、対象者数を増やしてさらに性格特性についてその下位区分と適切な調査項目を作成することが重要であろう。

6. 今後の課題

本研究は対象者の数が必ずしも多いとは言えなかったため、この結果を一般化するのは限界がある。そこで、今回調査の対象とした項目をしぼって選定するというより、むしろ分析の過程で、対象と成り得なかった項目のみを除くこととし、さらに対象者数を増やした調査を実施した上で最終的な調査項目を選定することが必要であろう。その際、特に性格特性については、新たな項目を工夫するなどの修正を加え、さらに検討したい。

参 考 文 献

- Brown, D.B. 1994. *Principles of Language Learning and Teaching* (Third Ed.) Prentice Hall.
- Ellis, R. 1986. *Understanding of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- _____. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- 北條 礼子. 1996. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(1)」上越教育大学研究紀要 16,1,185-196.
- _____. 1997a. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(2)」上越教育大学研究紀要 16,2,583-596.
- _____. 1997b. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(3)」上越教育大学研究

- 紀要 17,1, 269-281.
- _____. 1997c. 「英語学習において日本人学習者が用いる学習方略に関する研究」1997年教育工学関連学協会連合第5回全国大会講演論文集第二分冊 549-550.
- Kinsella, K. 1995. Understanding and Empowering Diverse Learners in the ESL Classroom. In Reid, J.M. (Ed.) *Learning Styles in the ESL/EFL Classroom* (170-194) Heinle & Heinle.
- LoCastro, V. 1994. Learning Strategies and Learning Environments. *TESOL Quarterly*, 28, 2, 409-414.
- Ogino, K. 1994. *A Study of Learner Characteristics of Japanese EFL Junior High School Students: Learning Style, Strategies, Motivation and Gender*. Unpublished MA thesis. Joetsu University of Education.
- Ohmra, K. 1996. *A Study of the Correlations between Aptitude, Motivation, and Personality with Measured Achievement among Different Grade Levels of Japanese EFL Learners*. Unpublished MA thesis. Joetsu University of Education.
- Oxford, R., & Crookall, D. 1989. Research on Language Learning Strategies: Methods, Findings, and Instructional Issues. *Modern Language Journal*, 73,4,404-419.
- _____, & Nyikos, M. 1989. Variables Affecting Choice of Language Learning Strategies by University Students. *Modern Language Journal*, 73,3,291-300.
- _____, Park-Oh, Y., Ito, S., & Sumrall, M. 1993. Japanese by Satellite: Effects of Motivation, Language Learning Styles and Strategies, Gender, Course Level, and Previous Language Learning Experience on Japanese Language Achievement. *Foreign Language Annals*, 26,3,359-371.
- Reid, J.M. 1987. The Learning Style Preferences of ESL Students. *TESOL Quarterly*, 21, 1, 115-126.
- _____. (ed.) 1995. *Learning Styles in the ESL/EFL Classroom*. Heinle & Heinle.
- Scarcella, R.C., & Oxford, R.L. 1992. *The Tapestry of Language Learning: the Individual in the Communicative Classroom*. Heinle & Heinle.
- Slavin, R.E. 1994. *Educational Psychology: Theory and Practice* (Fourth Ed.) Allyn and Bacon.
- Tsuchihira, T. 1993. Motivation and Personalities in Introducing Communicative English Teaching in the Japanese Context. *Tsukuba Eigo Kyoiku*, 14, 233-250.
- 山本真理子他 1994. 『心理尺度ファイルー人間と社会を測る』 垣内出版。

A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (4)

Reiko HOJO

In the field of the second language acquisition, learning strategies are reported to be closely related with other factors, such as learning style, motivation, personality and so on. Though not much research has been done on the relationship between learning strategies used by Japanese EFL students and these factors, the author has tried to investigate the relationship as well as to develop appropriate questionnaire items for these factors. However, in order to expand the framework of the studies, younger subjects, such as junior highschool students, must be included in the research studies. To achieve the goal, the preparation of appropriate questionnaire items for the target subjects is necessary.

The purpose of this study was to prepare or validate questionnaire items suitable for investigating learning strategies, learning styles, particularly, perceptual ones, and motivation of Japanese EFL junior highschool students.

Firstly, data on the factors mentioned above were gathered from fifty-nine junior highschool students in March of 1997, using a trial questionnaire consisting of fifty-five items as a total. Then, the data were analyzed by factor analysis, extracting 4 factors for learning strategies, 4 for motivation, 2 for perceptual learning style preference, and 3 for personality. These factors included 22, 8, 6, 11 items, respectively, totaling 47 items, which must and will be further examined with more subjects, since the number of the subjects of this study was not enough.

付録：調査項目（学習方略1—27；動機づけ28—35；知覚的学習スタイル好性36—41；性格特性42—55）

- 1 先生があなたを指名しなくても、頭の中で、答えを言ってみる
- 2 知らない新出単語があったら、それが用いられている文全体からその意味を推測する
- 3 英語で何かを言おうとすると、たいてい、言いたいことをまず日本語で考え、それから英語になおす
- 4 言いたいことがうまく相手に伝わらないとき、ジェスチャーを用いる
- 5 英文を読むとき、知らない単語の意味を調べる前に、文全体の意味をまず考えてみる
- 6 文章は文法の規則で分析せずに、できるだけそのまま暗記する
- 7 辞書で単語をよく引く
- 8 教科書の後の単語リストで単語や熟語の意味を調べる
- 9 英文を読むとき、全体を読む前にわからない単語の意味を調べてその意味を長文の横に書込む
- 10 正しく発音する努力をする
- 11 単語や熟語は単語カードを利用して暗記する
- 12 単語や熟語は単語テストで暗記する
- 13 授業で聞き逃した単語や文法について、授業意外の時間に勉強したり、練習する
- 14 単語は何回も書いておぼえる
- 15 基本文は何回も書いておぼえる
- 16 参考書やワークブックで勉強する
- 17 単語をおぼえるとき、発音とイメージや映像を結びつける
- 18 単語をおぼえるとき、すでに習っている単語と結びつけておぼえる
- 19 単語は何回も声に出しておぼえる
- 20 基本文は何回も声に出して、暗記する
- 21 単語が思い浮かばないときは日本語でおきかえる
- 22 英語の勉強になるから、という目的でテレビやビデオを見る
- 23 英語の勉強がうまく進方法を見つける努力をする
- 24 人から誤りを指摘されたらその理由を考える
- 25 英語の勉強でわからないところは人に教えてもらう
- 26 英語が思いつかないとき、他の人から教えてもらう
- 27 英語を聞いてわからないときゆっくり言ってもらう

- 28 英語が出切れれば英語を話す人々と、より簡単に友人になることができるから
- 29 より多くのさまざまな人と出会い、話ができるようになるから
- 30 将来、良い職業に就くために必要だから
- 31 社会的に認められるには、少なくとも1つの外国語を使えることが必要だから
- 32 学校で英語の試験があることや、進学するための入試科目だから
- 33 英語の試験でいい点数をとって、よい成績をとるため
- 34 英語でよい成績を取ると、親がほめてくれるから
- 35 英語で成績が良いと、先生や友達の評価が高まるから

- 36 テレビ番組やビデオの教材を用いて勉強することが好きだ
- 37 L1で外人の自然な英語を聞きながら、勉強するのが好きだ
- 38 グループになって対話練習やゲームをして勉強することが好きだ
- 39 何かをするとき、その指示を誰かによんでもらうより、自分で読む方がいい
- 40 教科書を読むより、先生の説明やテープを聞くほうがいい
- 41 何かをするとき、その指示を読んだり聞いたりするより、まずしてみるほうが好きだ.....
- 42 私は解（と）けないような問題ほど解（と）いてみたくなる（冒険心）
- 43 映画や小説（読み物）では、はっきりした結末（けつまつ）があるものが好きだ（あいまい性への耐性）
- 44 自分には長所がたくさんあると思う（自尊心）
- 45 グループ活動にはリーダーが重要だと思う（権威に対する態度）
- 46 初めて会った人でも、すぐ話しかできる（外向性）
- 47 私は難（むずか）しいと思うことほど、やってみたくなる（冒険心）
- 48 ジョークのおちがわからないときは、わかるまで気になるほうだ（あいまい性への耐性）
- 49 人前ではきまりが悪くて思うように自分を出せない（外向性）
- 50 人に勝（まさ）ると思う科目やスポーツがある（自尊心）
- 51 年長者（年長者）や目上（めうえ）の人は苦手（にがて）だ（権威に対する態度）
- 52 自分にはいろいろな良い素質がある（自尊心）
- 53 質問はないかと聞かれて、聞きたいことがあれば指名されなくても、自分から質問するほうだ（外向性）
- 54 人が笑っているときはいつも、何を笑っているのかが気になる（あいまい性への耐性）
- 55 先生や先輩（せんぱい）など、目上の人と話すとき緊張する（権威に対する態度）